

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 孤独の歌 ~

灯火

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～孤独の歌～

### 【Nコード】

N6348Z

### 【作者名】

灯火

### 【あらすじ】

30年間の人生に幕を閉じた…はずだったんだけど…

前世とは違う人生、前世とは違う容姿、前世と変わらない境遇、目的もなく、目標もない、そんな空っぽな2度目の人生。

けど…そんな中、出会った少女の笑顔は…なんだか…暖かった。

## 第一話「人生30年？」（前書き）

小説を書くのは初めての上、作者はリリカルなのはをそこまで深く分かってないので、多々至らない点がありますが、よろしく  
お願いします。

## 第一話「人生30年？」

仕事の帰り、ふと考えた…

生まれてそろそろ30年、俺はいつたい何をしているんだろうか？

仕事内容以外で誰かと最後にしゃべったのは、いつだっただろうか？

家族…は初めからいなかった、友達…は作らなかったのか作れなかったのか、まあ存在した覚えはない。

夢…特にない、趣味…特にない、目標…立てたことがない、ただ毎日仕事に行つて、帰つて、寝る。

毎日毎日それを繰り返すだけ…あれ？なんのために俺、生きてるんだろう？

「人間元来一人で生まれて一人で死んでいくのである」ってのは、誰の言葉だったか？

…うん

…死のう。

でもどうやって死ねばいいんだ？

出来ることなら楽に死にたい、苦しんだりせずに一瞬で…

そんな事を考えながら歩いていると、ふと目の前の横断歩道に少女が見える、信号は…赤い色で、馬鹿みたいなスピードで車が走ってきていた。

意識する前に、体は動いて、少女を車の前から突き飛ばした。

眼前にゆっくりとスローモーションのように迫る車、法定速度って、守る奴いるのかな？

頭に浮かぶのは、今までの人生…あれ？…これ背景違っただけであんなま変わんねえぞ？

…まあでも、このスピードなら痛みを感じる暇もないだろう。

ある意味、よかったのかな？

そんなことを考えながら、俺の人生は幕を閉じた。

…はず…だったんだけど…

第一話「人生30年？」（後書き）

導入編？

はじめての小説におっかなびっくりで…Orz

## 第二話「魔法都市？」（前書き）

導入編は4話までの予定です。

出生、転機となる場面までは、できるだけ詳しく書きたいのでご了承ください。

## 第二話「魔法都市？」

真っ暗だ。

俺。どうしたんだっけ？

確か…仕事の帰りに死のうと思いい立ち、んで幼…女の子をかばって車に…

俺死んだよな？うん、あのスピードの車と衝突したんだし死ぬはうだよな？…ね？

ここが死後の世界ってやつなのかな？

なんかイメージと違う。

頭を整理しながら、考える…

死のうと思っすぐ死ねた、しかも痛みを感じる間もなく、これは神様に感謝しないといけないな…俺無神論者だけど…神様ありがとう！！

しかし誤算が一つ、

死んでも意識がある

これには正直困った、死んだら意識なんかなく何も感じなくなるんだとばかり思っていたが、意識はしっかりしてるし、なんか生温か

いし、息苦しい……うん？

息苦しい？んなばかな、何で死んでるのに息苦しい？死んでも呼吸  
つてするのかな？

しないよな？

予想と違う状態に戸惑う俺、さらに追い打ちをかけるようにいきな  
り全身が絞め付けられた。

「 !?!?!? 」

痛い、とんでもなく痛い、痛みも感じるのか！

声も出ない！

何かに引っ張られるような感覚、急に辺りが眩しくなった。

「 もう少しですよ！頑張って！ 」

なにを？

「 今頭が出てきましたよ！もう一息です！ 」

頭？なんの？

「 赤ちゃんも頑張って！もうすぐ出られるからね！ 」



そして、自分のことで頭がいっぱいだった俺は、母親であろう人物の複雑な表情に気が付いていなかった…

## 新生児室

あれから、丸一日たった。俺ははまだ整理のつかない頭で状況を確認していた。

?俺は猛スピードの車に轢かれて死んだ…はず

?だけどなぜか生きていて、体は赤ん坊になっている

?転生?

?プレートに書いてある文字が読めない…てか何語?周りの機械も見たことないし…

?なんか眼がチカチカするっていうか、変なオーラが見える

?俺の母親であろう人物は一度も俺を抱いていない(てか顔もろくに見てない?)

まあ…?はどうでもいいとして、重要なのは?…?だ。

まず、?…認めたくないが、状況的に転生って考えるのが一番しっくりくる。

次に、?…見たこともない文字ってことは、ここは外国?でもしやべってる言葉は普通に聞き取れる。

となると考えられるのは…別の世界?

最後に、？…これが一番の問題だ、なんかハウスタストのCMみたいな、なんて表現したらいいのか、細かい粒みたいなものが空中にたくさん浮いている。でも触ろうとしても触れない…なにこれ？

そしてなんか、看護師もそうだけど周りの赤ん坊もなんか、いろいろな色のオーラ？ってか光の膜みたいなのに包まれてる、てか俺も包まれてる…色は薄緑。

死ぬ前に、こんなものが見えた覚えはないから、過去に戻った。とかではなくまったくの新しい体と考えるのしかない。

よし、まとめよう…つまりは…

俺は人生に絶望して死にました でも神様の気まぐれで前世の記憶を持ったまま転生しました しかもここはどうやら前住んでたところとは違う世界っぽい しかも変なものが見える目のおまけつきだ

神様ってやつは…俺が嫌いなようだ もうやだ…この人生…

それからさらに、4日たった。

ケージの前に誰がいる、誰？この女の人

疑問に思っていると、近くにいた看護師が女性に声をかけた。

「退院ですね、外は暗いので気を付けてくださいね」

「はい、お世話になりました。」

ああ、こいつ母親か…初めて見たよ顔、変なオーラ？は緑色ね、はいはい一緒一緒。

そのまま俺は、母親？に抱かれて病院を後にする。

で、現在なんかどっかの建物の前にいる。時刻は深夜。

なんか門にプレートが貼ってあるってことは、何かの施設かな？…読めないけど。

で、この母親？かごに入れた俺を、門の前に置いて泣きながら何か言ってる。

「だから、ごめんね…ごめんね…貴方が悪いんじゃないのよ、あいつが…悪いの…」

えと…つまりは、どっかの男と子作り 捨てられた もう出産拒否できない日数がたっていた でもこの子を見ているとあの男を思い出すから一緒にはいられない 全部その男のせいだから、怨むならそいつを恨んで

知らんがな。

というか、今回の俺は特殊な例として、物心ついてない赤ん坊に何言っただって覚えてないだろう。

じゃあ、何のために？そんなの決まってる自分を正当化するためだ……うぜえ。

前の世界の母親も…そうだったのかな？生まれたばかりの俺に、自分を慰めるためだけの言い訳を並べて、捨てて行ったのかな？

何かすげえ腹が立つ。怒鳴り散らしてやりたいが、悲しいかな「オギャア」ぐらいしか言えない身…転生したっていうのに、前と何も変わらない状況…いや、捨てられる様を認識できる分、今のほうが悪いか。

そして戯言を並べ終わった、母親？…いやもうどっかのおばさんは去って行った。

一人残された俺は、これからの事を考えていた。まあロクな施設じゃないよな…経験上

こうして、俺の2度目の人生は幕を開けた…けど、もう幕降ろしてえよ…

第二話「魔法都市？」（後書き）

話が思ったように進まない(; ;)

2話目で原作キャラの一人も出てこない体たらくORZ

小説書くのって難しいな;; ;

次回いよいよ原作キャラも登場して「なのは」らしくなってくる…かな？

### 第三話「出会い？」

自分を生んだおばさんに、孤児院の前に捨てられて7度目の夏

ジリリリリリ！！

カチ！

枕元の目覚ましが鳴り、目を覚ます。体を起こし辺りを見回す。

お化け屋敷みたいな安アパート、必要最低限の物しかない狭い部屋  
…ここが、今の俺の住処だった。

俺の引き取られた（捨てられた）孤児院は「エルザード孤児院」と  
いう個人経営の孤児院だった。…いや別にダジャレじゃねえよ？

どうやら、この国？「ミッドチルダ」という場所では孤児育成に對  
し、多額支援金が降りるらしい。孤児の育成に力を入れているのか  
？それとも孤児が量産されるほど危なっかしい世界なのか？まあ詳  
細はよく分からないが、ともあれ孤児を引き取っている施設には支  
援金が支払われる。

勘のいい人なら気付くだろうが、俺が引き取られた孤児院は、経営  
者が楽しんで稼ぎたいがためだけに作られた施設だった。

孤児を拾い、最低限の食事だけ与えて育てる、残ったお金は懐に入れて、成長した子供には家事をさせる。新しい孤児が来れば、その成長した孤児に育てさせる…といった感じだ。

実際俺の育児（世話？）をしてくれたのも10歳に満たないであろう子供だった。

この世界の常識なんかについても、その子供やほかの子供に教わった。

この「ミッドチルダ」という世界では、魔法が日常的に使われてる世界らしい。

初めて聞いた時は、鼻で笑いそうになったが、残念なことに事実っぽい…ただ、この世界の魔法は俺のイメージしていたそれとは違って、超科学的な物みたいだった。

そして、魔法について知ると同時に、俺の目についてもようやく分かってきた。どうやら俺の目は、空気中の「魔素」や人の持っている魔力、という物が目視できるようだった。

まあ見えたからどうというわけでもなく、4歳になってようやく自分の意思で切り替えられるようになるまでは、目がチカチカしてしよすがなかった。

そういった感じに、この世界について知るにはこそこそ役に立った…精神的にはもう立ち直れないかもしれない…意識がある状態で赤ん坊とか…マジ拷問…

しかしそんな孤児院も、5歳になったところに金だけ盗んで逃げだし

た。

正直、気持ちが悪かった…他人を利用することしか考えてない経営者、影で不平不満を言うだけでなにもせず、空から恵みが降ってくるのを待つだけの餓鬼共。…まあ逃げ出す時に、「時空管理局?」とかいう軍隊みたいなところに通報しといたし、まあなんかあるんじゃない?

逃げ出した後も、この世界については驚かされた。まず仕事、なんか今の俺と同じぐらいの歳…10歳にもなっていないような子供たちが、普通に働いてたりする…どうなってんだ?労働基準

そして、「時空管理局」という軍隊みたいな組織、なんか10歳ぐらいの女の子が街頭のテレビにエースとして映っていた。

これなら俺も職に就けそう、とか思ったんだけど…この世界にも履歴書はあるみたいだった。子供でも履歴書を持参しないと雇用してくれないらしい…なんでそんなとこだけしっかりしてるんだ?

つまり、こっちの世界での自分の名前すら分からない俺は、もちろん論外、しょうがないので残飯漁って腹を満たし、公園で寝る生活を繰り返した…なんというホームレス。

孤児院から盗んだお金は、まだあったが…いざという時のために取っておいた。

それで、いつ頃だったか：まあ慣れた手つきでゴミを漁ってる時に、ふと見つけた壊れた機械、見た感じテレビの様な物。

前世では、何を隠そう家電製品の修理の会社に14年間勤めていた俺（孤児院を出ないといけない年齢が16歳だったから）もしかして直せるんじゃないかね？と中を見て見ると、元居た世界と殆ど変わらない構造だった。

これは金になる！って考えた俺は、取っておいたお金で部品や工具類を買って、捨てられている機械を片っ端から集めて回った。

中には構造がさっぱりな物もいくつかあったが、家電製品類は概ね元の世界と同じような感じだった。

その後、俺は直した家電品を安値で販売、と同時に家電類の修理を請け負う小さなお店の様な物を始めた。場所はいつも寝ていた公園で、レジヤースhirt引いただけの小汚い店だった。

しかし、意外なことにこの世界の人たちは、財布の紐が緩いのか？子供が売ってるのを見て同情する偽善者ばかりなのか知らないが、店はそこそこ繁盛していた。

しかしそうになると、困った問題も出てきて、先に挙げた構造がさっぱりわからない機械類の修理も出来ないか？と聞かれることが多くなってきた。

出来ないって答えても、大抵は子供なので問題なかったが、それで客足が遠のいては困るので、稼いだお金で本屋へ行き、いろいろな機械類の本を買い勉強した。その甲斐あって、家電品はもちろん、

簡単な構造をしている物なら、魔導師たちが使う「デバイス」という物も修理できるようになってきた。

そうになると今度は、やたらめったら「デバイス」の修理の頼まれることが多くなってきた。簡単なものなら修理は出来たが、複雑な「カートリッジ」などを搭載している物はお手上げだったので、また本を買って商売の合間に勉強した。

おかげで、5歳の頃から2年たった今は、生活するだけなら不自由なく暮らせるぐらいは稼げるようになっていた。

ただ…そんな俺を最近悩ませている奴が…一人

「こんにちは、今日もお店頑張ってるんだね」

そう言っつて、店の前にしゃがむ金髪の女性、ロングの金髪を緩く後ろで結んだその子は、10人に聞けば9人以上は美少女と答えるであろつ容姿をしていた。

「……またあなたですか」

俺は感情のこもってない声で答える。

「うーん、だめだよ？お客さんなんだしもつと愛想良くしないとね」

「……毎日、商品もロクに見ず話だけ振ってくる人お客なんて呼びません」

そう、これが最近の俺の悩みの種だった…この女性、フェルトだったかフェイトだったか？

まあとにかく、最近毎日来てはくだらない話を振ってくるだけで、なにも買わずに帰っていく。しかも、話す内容は「家族はいないの？」とか「何か困ってない？」とかそんな、どこかの保護官みたいなセリフばかりだった。

「でも、いつも寂しそうな顔してるよ？私でよければ相談に乗るよ？」

何の見返りも求めず、差し伸べられる優しさはただ単純に気味が悪かった…

「……あなたが、帰ってくれば元気になりますよ」

感情のこもってない声で返す。

「その…話したくないなら無理にとは言わないけど…でもね、人は一人では生きられないんだから、もし何か辛いことがあったら…私じゃなくてもいいから友達とかにでもいいから、話してみて…ね？」

…？

「……え？……生きていくのに、他人って…必要？」

「……！！？」

ふと、疑問に思ったので聞いてみただけだった。

すると少女は、何か驚いたような目をして固まっていた…俺何か変なこと言ったか？

「う、ごめん…また、来るね…じゃあ」

そう言って、走り去っていた…別にもう来なくてもいい。

フエイトSide

「こんにちは、今日もお店頑張ってるんだね」

私は、いろいろな機械が並べられているシートの前に座り、その店主である少年に声をかけた。

「……………またあなたですか」

返ってきたのは、少しも感情のこもってない声、この子を見つけたのはいつだったろうか…

仕事の帰りに立ち寄った公園で、一人シートの前に座っていた少年たぶん年齢は私より少しだけ下ぐらい、ボロボロの服を着て、まったく切っていないように見えるボサボサの長い髪、元は銀なのだろ

うけど汚れて灰色にみえる髪の色、まるで世界から一人切り離されたような寂しげな眼をしていたその子を、ほおっておけなくて声をかけたのが確か最初。

なんだから…なのはに出会う前の自分を思い出してしまいそうな目だった。

それから、少しでも心を開く手伝いになればと思って、仕事の合間にたびたび訪れているけど、心を開くどころか、うっとおしく思われてそうだ。

でも…それでも私と話すことで、少しでも寂しさが紛れているといんだけど…

そんなことを考えながら、出来るだけ明るい声で返す。

「うーん、だめだよ？お客さんなんだしもっと愛想良くしないとね」

「……毎日、商品もロクに見ず話だけ振ってくる人お客なんて呼びません」

…痛いところを突かれた、確かに営業妨害かも…で、でも仕事の途中で寄ることが多くて、何かを買って持っていくわけにもいかないし…それにたぶん何か買ったなら、追いつ返されそう…

「でも、いつも寂しそうな顔してるよ？私でよければ相談に乗るよ？」

少しでも、この子のことが知りたくて、何か話してくれれば何かしてあげられそうなのに…

「……あなたが、帰ってくれば元気になりますよ」

うう…今の言葉は少し、いや結構堪えた…そ、そんな敵意をストリートに向けられると、けどここで諦めたくなくて…

「その…話したくないなら無理には言わないけど…でもね、人は一人では生きられないんだから、もし何か辛いことがあったら…私じゃなくてもいいから友達とかにでもいいから、話してみて…ね？」

そう…これは私がこの数年で学んだこと、一人でいる限り、辛さや寂しさはなくならない…誰かに少しだけ話すだけでも、楽になることだって…いっぱいあるんだよ？

「……え？……生きていくのに、他人って…必要？」

「……！！？」

返ってきたのは、いつも通りの感情のない声…向けられた目は、まるで…この世界に何も期待していないような、まるで何十年も経て悟ったかのような、冷たい…とても冷たい目をしていた。

「い、ごめん…また、来るね…じゃあ」

その場に、居続けることができなかった。あんな目を見たのは初めてだった…

私が…が考えてたよりも…あの子の闇は大きいのかもしれない…そう、なんだか…死にたがっているようにすら見えた…

### 第三話「出会い？」（後書き）

やっと原作キャラの登場で「なのは」らしくなってきたかな？

…まだかORZ

次が導入編の最終話です、その後舞台はStrikersへと移ります。

## 第四話「転機？」（前書き）

導入編ラストです、やっと主人公の名前が明かされます。

#### 第四話「転機？」

望まないまま幕を開けた第二の人生、前世と変わらない一人ぼつちの人生のほずが…

「…って訳で、やっぱり一人のままじゃ出来ないことも多いと思うんだ」

「……その考えは否定しませんし、正しいとも思いますが、俺には関係ないです」

感情なく返した言葉に苦笑いするのは、ここ最近しょっちゅう来る常連の冷やかしの…もとい現在は客の、「フェイト・テストロッサ・ハラウン」（執務官試験に向け勉強中）。

…なんで、ファミリネーム2つあんの？ミドルネームってやつかな？よくわかんね。てか、毎日こんなところ来て勉強はいいのか？てか試験で筆記とかなのかな？まあ、興味はないけど。

まあ、ともあれこのフェイトさん（今は一応年上なので）毎日毎日うちの店？に来ては、保護官みたいな世間話ばかりしている。

「やっぱり、手際がいいね〜その歳でそこまでできるなんてすごいよー！」

「……まあ、これが仕事ですからね」

現在俺は、このフェイトさんのデバイスの清掃メンテをしている。あまりに毎日来るので、昨日「冷やかしながらもつくんな!!」的なことを言ったら、今日来るなり頼まれた。

てか…なんだこのデバイス、インテリジェントデバイスにベルカ式カートリッジシステム、最近急速に進んでる研究ってのは知ってたけど、実物見たのは初めてだ。

繊細なインテリジェントデバイスに、カートリッジシステムは相性が悪く、研究はされているが流通している物は、殆どアームドデバイス形式のはずだ。

しかしこのデバイスは、それを全く感じさせない。しかも、そのカートリッジもミッド式ではなくベルカ式、内部の構造も見たことないような高級パーツがふんだんに使われてて、まさに『一人のために作られた傑作』とでも言える出来だった。

このデバイス設計した奴、どんな頭の構造してんだ…てかこんなの、公園で露店してる子供にメンテ頼むって、どういうことだ。まあすごい勉強にはなるが…

「あ、そういえばこの間、地球の海鳴市で美味しいケーキ屋さんを見つけてね」

また来た、地球の話題。いつだったか、話の中で地球という単語が出てきて、つい反射的に反応して、「自分も地球の事をそれなりに知っています」みたいなことを言ってしまった。

それからというものの、まるで攻め込む隙を見つけた!とでもいうような勢いで、毎日地球の話題を話してくる。地球の友達の事、最近

あつた出来事、地球の食べ物、よくまあ話題が続くもんだと感心する。

しかし、話を聞く限り、どうもこの世界の地球は俺の居た地球とはどこか違うような印象だった。…いちいち話したりはしないけど…

「ねえ…そろそろさ、えと…名前、教えてくれると…嬉しいんだけど…」

名前？そういえば考えてなかった。この世界での本当の名前は、俺は知らない。前世の名前は完全に日本人の名前「ミッドチルダでは珍しい。アパート借りる時、不思議そうな顔されたもんね…

それから、聞かれることなんて無かったから…考えてなかった。とりあえずここはシカトだ。

そんなことを考えてる内に、メンテは終わった（てかすることなんて殆ど無かった）

「……はい、終わりましたよ」

余計なことは言わない、食いついてきても面倒だし…

「ありがとう！…えといくらになるかな？」

「……5000です」

「え？それはいくらなんでも安すぎない？普通の専門店の3分の1くらいだけ…」

「……子供の露店で客を呼ぶには、安さぐらいしか武器はないですからね」

「そっか…えと…細かいのは…」

「プププ！」

フェイトさんがお金を探そうとしていると、何やら通信が？

「じゅめん！ちょっとまってね」

そう言っつて、通信するフェイトさん。が、次第にその顔は青ざめ…  
というか蒼白といえるくらいに変わっていく。

「…うそ、なのはが…そんな…」

なのは？えと、確か地球の友達で管理局のエース様だったっけか？

「うん！すぐ行く…場所は？…うん分かった！」

焦ってる様子なので、声をかける。

「……急ぐんですよね？お金はどうせまた来るんでしょうし次会ったときでいいですよ」

「！…？ごめん！！ありがとう！！また来るから！！今度来た時には、名前教えてね！！！」

矢継ぎ早にそう言っつて、ものすごいスピードで走って行った。…まあどうせまたすぐ来るだろう。

「……名前、考えとかないとな……」

それから少しして、管理局のエースが撃墜されたという噂を聞くようになった、そしてその後フェイトさんと再開するのは8年後だった

フェイトさんが、走り去った後…いつも通りシートの前に座っている…

「返して！！返してよぉ〜！！」

という、喧しい声が聞こえてきた。

声のしたほうに目をやると、今の俺と同じ年ぐらいの少年3人、青い髪の少女1人が何か言い争っていた。

「ここは俺様のナワバリなんだから、入ってきたてめえが悪いんだよー！」

小太りの少年が、ポーチだか鞆だかそんなものを振り回しながら、訳のわからないことを言っている。ナワバリって…お前はどこのライオンか？

「うう…返してえ…」

少女の方は、完全に泣きだし同じセリフを繰り返すだけ…

…うるせえ…喧嘩ならよそでやれよ。

「おいそこのお前！何じろじろ見てんだよ！！」

小太りの後ろに居た少年…仮に子分Aとする。その、子分Aがこちらに気付いたのか声を張る。

「あ〜ん？てめえ…なんか文句でもあんのか？」

小太りがこちらに近づいてきて、俺の胸倉を掴んで、旧時代のチンピラみたいなセリフを吐いた。

「俺様は　　ふぎゃあ!？」

顔が近かったので、とりあえず殴った。

「て、てめえ…い、いきなり何しやが　　るふあ!？」

尻もち付いて、涙目で何か言ってきたので、次は顔を蹴った。涙を流しながら、子分A、B共々怯えた目でこっちを見ている。まあ当然の反応か…

「……………やかましい、失せろ……………もう一回殴るぞ?」

とりあえず退場いただく。「もう一回殴る」の部分にビク!っ

した小太りは、慌てたように走り去って行った…子分A、Bははるか前方を走ってた。…人望ねえな小太り…

騒音の現況が走り去った後、俺の足元にはさつき小太りが振り回してたポーチのようなものが、落ちていた。

「えう…そ、それ…」

青い髪の少女がこっちを見て、涙目で何か言おうとしている。…ああ、これこいつのか。

「……………ほら」

ポーチ？を拾い上げて、その少女に渡し、俺はいつものシートの前に戻る。

騒音の元は、去ったしこれでいつもの日常が返ってきた。

……………さっきの少女が隣に座って、こっちを見ている以外は！！

なんだ？この状況、なんか文句があるのかこいつ…ああ、あれか？実はさっきの小太り達は友達で、お遊びでやってましたとかそんなのか？…だとしてもうるさいお前らが悪い。

「あ…あの…」

やはり何か言いたいことがあるようで、こつちをチラチラ見ては顔を伏せる少女。

「……なんだよ？何か言いたいことがあるのか？」

とりあえず、聞いてみる。もし文句だったら、適当に怒鳴ればどっかいくだろ…

「あの…その…ポーチ…あ、ありがとう…」

…は？

「取り返してくれて…ありがとう」

ああ、こいつには今は、俺がこいつのためにポーチを取り返したように見えたのか、絡んできたから追っ払っただけで、割って入る気なんてなかったんだが…

「……商売の邪魔だった奴を、追っ払っただけだ助けたわけじゃねえよ」

「…お店、やってるの？」

…失言だった。少女はシートの上に置かれた商品を、珍しげな眼で眺め始める。

まずい…居つかれる前に逃げないと…！

「……そうだけど、もう今日は店じまい」  
物を片付け、撤退の準備をしようとする。

「ホント!？」

なぜか嬉しそうな少女。

「じゃあ!一緒に遊ぼ!」

「……は?」

一緒に遊ぶ?何言ってるんだこいつ…確かに見た目は同じ年ぐらいだが、精神的にはもう37歳な訳だし…正直嫌だ…

「……いやだね、俺はもう帰……る……」

断りの言葉を言おうとした瞬間、涙目になる少女。

「うう…いつしよに…あそぼ…」

「……いやだから、俺は……」

「……いつしよ…ぐす…あそ…ぼ」

「……」

こいつ、捨てられた子犬のような目で…

「いつしょに…」

「……ああもう！分かったよ遊べばいいんだろ！遊んでやるから泣くな！」

泣きだされても困るので、俺はしょうがなく折れた。…てか…あの目は…無理。

「ホント！…やった〜！！」

とたん、さっきまでの顔はどこへ行ったか笑顔になる少女。嘘泣き…だと…そんな高等技術をこの歳で…

「……はあ、とにかく商品を一度家に置いてからな！」

最後の抵抗、一人で帰れたら逃げよう。

「うん！ついてく〜」

…さいですか。

がっくりと肩を落として歩く俺、後ろを楽しそうについてくる少女…どうしてこうなった？

「あー！…そういえば…」

少女が何かに気付いたように声を上げた。

「………今度はなんだ？」

「名前！」

「……はい？」

「お名前、教えて〜」

名前…：そういえば考えてなかったわ。ええっと…名前…名前…

「……コウタ」

「こつた？」

とりあえず、前の世界での名前を名乗った。あとはええっと…ファミリーネーム…は…

「……コウタ…コウタ・エルザード…」

とりあえず、孤児院の名前から取った。バランス悪いが、まあどうせ今日限りだしこれでいいよな。

「コウタ」

嬉しそうに俺の名前を呼ぶ少女。

「コウタ！私の名前はね」

人生の  
思えば、これが始まりだったのかもしれない、俺の…第二の

人通りの少ない公園、そこに佇む一人の少女。

「…今日も…いない…か、どうしたんだろう?」

ここ数週間と同じように、少女は誰かを探し辺りを見渡す。

「お店…やめちゃったのかな?…それとも別の場所が変わったのかな?」

そう呟く少女の背中は、どこか寂しげで、

「お金…まだ払えてないよ…名前も教えてもらってない、私はあの子を助けてあげられなかったのかな?」

その問いに、答える人はいなく夕暮れ時の公園には静かな風だけが吹いていた。

「また…どこかで会えたらいいな…」

そう呟き少女は、風になびく金髪を押えながら、公園を後にした。

そう、少女は知らなかった。彼女の探している少年は、偶然知り合った青い髪の少女のワガママに付き合わされ、ここ数週間露店を出せずあちこち連れまわされていたことを…二人が再び出会うのは、今から8年後

#### 第四話「転機？」（後書き）

やっと導入編が終わりましたORZ

次回より原作のストーリーに入っていきます。

基本的に原作に沿って、進んでいく予定ですがところどころ変えていきます。

今回は8年たち、主人公の性格が激変しますが、その辺の間の8年間はストーリーの中で入れていきます。

## 主人公設定（前書き）

箇条書きにて、主人公設定

話が進むごとに更新します。

## 主人公設定

### プロフィール

名前：コウタ・エルザード（旧名：村山幸太）

年齢：15歳（前世の享年30歳）

身長：174cm

体重：70kg

魔力ランク：A-

魔導師ランク：陸戦B

魔力光：薄緑

階級：二等陸士

術式：ミッド式

ポジション：オールラウンダー

得意な事：魔力収束・魔力操作（形状の変化・圧縮など）

苦手な事：魔力の瞬間大量放出（瞬間的に多量の魔力を放出する砲撃魔法などが使えない・収束魔法もしかり）・魔力の遠隔操作

レアスキル：魔力・魔素を目視出来る目（切り替え可能）

所持資格：大型二輪免許、機械設計技術士2級、エネルギー管理士、危険物取扱

趣味：強いて挙げるなら料理（食べるのはほぼスバル）

特技：機械いじり

好きな物：友達、仲間

嫌いな物：自分、神様

リリカルなのはの世界に転生した主人公、当初は枯れた性格をしていたが、8年間で心境の変化があり現在は丸くなっている。

魔力操作・魔力収束については、すごい才能を持っているが、魔力の瞬間大量放出が苦手なため、強力な魔法がまともに使えず、高めの魔力量は宝の持ち腐れ。（Bランク相当の魔法は、発動するまで普通の倍ぐらい時間がかかる・Aランク以上なら3倍以上）

上記の理由のため、収束はできても発射の「瞬間」に多量な魔力が必要な収束魔法・砲撃魔法は使用できない。

また、魔力の遠隔操作も苦手なため、誘導弾・フェイクシルエツトなどの遠距離操作魔法も使えない。

その為、魔力を圧縮することで威力を、加速魔法を組み込み、速度・連射を上げることで命中力を上げている。（圧縮なくティアナと同じ時間でシユートパレットを発動した場合の威力は、半分以下）

目下の悩みは、火力不足

転生前は、なかなかハードな人生を歩んできたため、自分に対して損得勘定なく向けられる好意や優しさが苦手。

前世を通して初めて「絆」と呼べるものを手にしたせいか、友達や仲間を大切にしている、感情の機微にもよく気がつきフォローなどもするが、自分の事や気持は他人には話さない。

本人曰く「目的も、目標もない」ため、昇進やランクアップに対しては興味がなく、約5年前に自身に誓った想いだけで魔導師を目指した。

スバルとは7歳の頃からの幼馴染とあっていい関係で、昔からワガママに振り回されている。

ティアナ曰く「スバルに弱い」。

普段はめんどくさいなどやる気のない発言ばかりをしているが、実際は傷つくのが怖く、予め「いやいや付き合った」などの言い訳を用意したいがために、やる気なく振舞っていて、自分でもそれを自覚しているため自分が嫌い。（根は真面目なお人好し）

前世と幼少の頃、職としていたため機械いじりが得意。

フェイトとは、幼少の頃に面識があり、そのころ取った態度について謝罪したいと思っている。

どのポジションも本職には敵わないが、それなりにこなせる為、ポジションチェンジが得意なオールラウンダー。（スバル・ティアナと組む際は主にフルバック・クロスシフトではガードウイング）オールラウンダーとして、スバルやティアナに付いていくため、訓練校の頃から毎晩自主トレを欠かさず行っている。（隠れてやっているため周りの評価は、いろいろこなせる天才）とある事情のため、ゲンヤに対しては頭が上がらない。

デバイス

名称：なし

種類：ストレージデバイス

形状：ショートライフルの上下に刃がついた両刃の銃剣

カートリッジ：2発

・近接と遠距離と、どちらでもこなせた為制作したデバイス。  
AIはプログラム制作が面倒なため搭載してない。

使用魔法（5話現在）  
原作登場は オリジナルの物は横  
に

【砲撃魔法】

なし

### 【射撃魔法】

魔力の遠距離操作が苦手なため、弾に誘導性を付与できず、すべて直射型。

魔力の最大放出量も低いので、魔力を圧縮することで威力を上げている。

### シュートパレット改

#### 直射型

魔力の遠距離操作が苦手なため、誘導性が付与できないため改良。

加速系魔法の術式を応用しているため、速度と連射性能に優れる反面、火力は低い。

### スパイラルパレット

#### 直射型

魔力で作った三角柱型の弾に、ドリルの要領で回転を加えたショット。

貫通力・速度に優れるが、サイズはビー玉位で爆発もしないため、バリア破壊ぐらいしか使い道はない。

### ソニックパレット

#### 直射型

速度＝威力、カートリッジを2発ロードして発動する。

様々な加速魔法の術式を応用して、音速を超える速度で圧縮した魔力弾を打ち出す。

ただし、魔力の圧縮にかかる時間が約1分、とても実戦向きではない。

### スナイプパレット

#### 直射型

量遠距離用魔法、最大射程は約3km、カートリッジ2発ロード。圧縮した魔力弾にドリル回転を加え、威力よりも貫通力に特化した射撃。弾速も速い。ただし、魔力圧縮に約2分かかるため、使用機会は殆どない。

### ジャンクパレット

#### 直射型

簡単にいえば、「スターダストフォール」の劣化版。サイズの小さい瓦礫などを加速させて打ち出すだけの魔法。打ち出せるサイズは最大で掌に収まるくらいまで。AMF対策に開発。

### 【近接魔法】

### スパイラルランス

デバイスの先に、魔力を螺旋回転させ貫通力を高める魔法。貫通効果などはない。

### 【幻術魔法】

オプティックハイド  
術者と術者に接触した対象を透明にし、見えなくする幻術魔法。

### 【防御魔法】

基本のプロテクション・シールド

アクティブガード

低速の爆風を発生させ、対象の速度を減衰させたり、柔らかく受け止める。

爆発の規模等は、目算で調整する。

ホールディングネット

網状の魔法で対象をキャッチする。

### 【捕獲魔法】

リングバインド

基礎的なバインド魔法。

### 【補助魔法】

フィジカルヒール

軽傷を直す程度の回復呪文、コウタはあまり得意でないため時間がかかる。

フィールドインベイド以外の基本ブースト系魔法

ブーストアップ・ジャンプ

脚力を強化する補助魔法。

主にジャンプで移動する際に使用。

### 【移動魔法】

浮遊

魔力によってその場で10cmほど浮くだけの魔法。

移動はできない、スバルに引っ張って移動してもらう際に使用。

ソニックムーブ

あたかも瞬間移動したかのように見えるほど、高速の移動を行う。

ブリッツアクション

腕の振りやフットワーク等の体全体の動作を高速化するための魔法。  
近接戦闘の際に使用することが多い。

## 主人公設定（後書き）

な…なげえ…魔法と分けようか…

基本的に主人公はそこまで強くはないです、

攻撃力・防御力はスバルより低く

幻術・射撃ではティアナに劣り

突貫力・スピードはエリオに届かず

補助・支援ではキャラより効果が低い

といった感じになります。

後半になれば若干強くなつては行きますが…

後、オリジナルキャラは主人公と後1体（人間じゃない）しか出さない予定です。基本的には原作に主人公が加わるという形で進んでいきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6348z/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 孤独の歌 ~

2011年12月23日01時52分発行